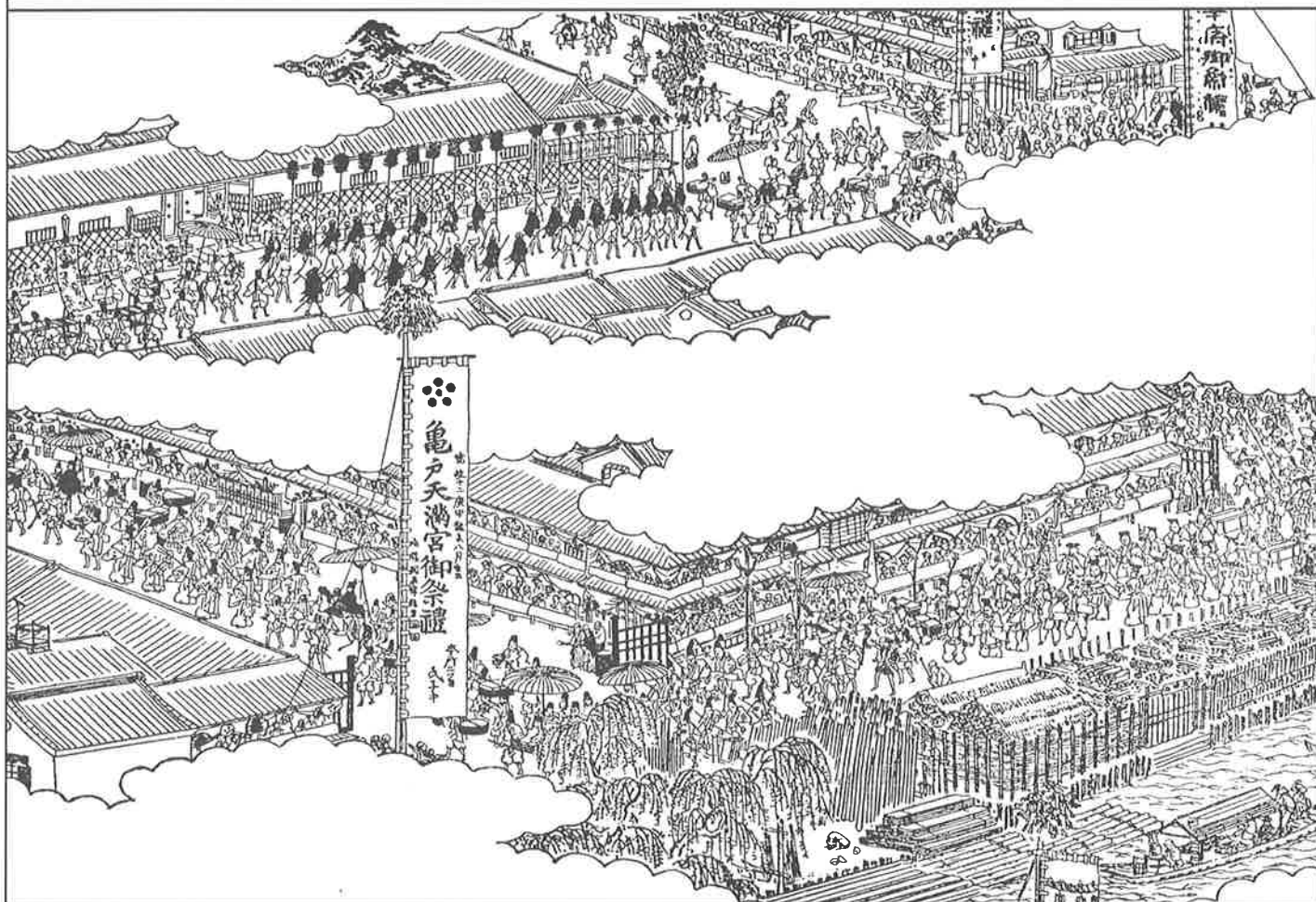


江戸東郊の行楽地 — 深川の周辺 —



亀戸天満宮
『江戸名所図会』

江戸時代の幕開けとともに埋め立てが始まった江戸東郊の深川は、富岡八幡宮の造営によって信仰の場として栄えていきました。そこにはやがて茶屋ができ、江戸時代の半ば以降に江戸近郊の行楽地として急速に発展していきます。

ここでは、深川と同じく「川向こう」と呼ばれ、江戸市中の人々の日帰りの行楽地として発展した亀戸、大島、砂村新田、そして向島の名所や名物をみていきましょう。

『江戸名所図会』と亀戸

天保5年（1834）から同7年にかけて成立した『江戸名所図会』は、江戸市中と郊外の名所を紹介した日帰りハイキングのガイドブックです。この中に描かれた亀戸の名所は、梅や藤などで

名高い亀戸天神、道祖神祭の行われる香取神社、六阿弥陀詣でのひとつ常光寺、萩寺とよばれる龍眼寺など、四季おりおりの楽しみに彩られています。



砂村富岡元八幡宮
『江戸名所図会』

大島・砂村の名所

大島にあった五百羅漢寺は、大伽藍と500体以上の羅漢像を配置した「三匠堂」が壮観であったと伝えられています。

また、砂村の元八幡は、八重桜で有名でした。周辺は砂村新田などの近郊農村で、野菜の促成栽培がさかんに行われていました。『江戸名所図会』には、そののどかな風景の中、海岸の道を歩いて行く人の姿が描かれています。

墨堤の桜と向島の名所

砂村新田、大島、亀戸の北に位置し、さらに一層ひなびた郊外であったのが向島です。

向島は、江戸時代には正式な名称であったわけではなく、「隅田川の向こう」ということで、こう呼ばれたようです。隅田川に沿ったこの地域は「墨堤」と呼ばれ、桜の名所でした。

向島百花園（新梅屋敷）や三囲社と、対岸の新吉原がひとつの文化圏となって、為永春水の



「江戸自慢三十六興」元治1年より
向嶋堤の花並びにさくら餅〔広重画〕
(墨田区立すみだ郷土文化資料館蔵)

『春色梅見誉美』など多くの文芸作品の舞台となっています。

このような背景のもとに向島には様々な食べ物屋が生まれました。ことに有名だったのが桜餅です。かごに詰めて紐をかけた土産物用の桜餅をたずさえて、桜の花の下を行く人の様子が錦絵に描かれています。

このほか玉子焼き、しじみ汁、すずめ焼き、芋田楽、鯉こく、鯉のあらい、麦飯・とろろ汁、茶づけなど、「向島の名物」とされた食べ物が数々みられます。向島が江戸市中に住む「食道楽」の人々に興味をもって見られていたことは、向島の食べ物を題材とした川柳が多いことから知られます。

隅田川七福神のひとつでもある弘福寺の近くに武蔵屋という料理屋があって、ここは「鯉こく」で有名だったため、文化年間（1804～18）には、

向島お寺の鯉で飯をくひ

文政年間（1818～30）には

向島鯉のかんばん寺へ出し

という落書が江戸市中でみられたほどです。

江戸の人々と「行動文化」

江戸という町の特徴がよく表れた現象として「行動文化」の活発化ということがいわれます（『江戸町人の研究』第1巻）。「行動文化」とは、芝居の見物や名所への行楽のように、行動することそのものを江戸の文化のひとつとみた呼び方です。その中には芝居・寄席の鑑賞、神社・寺院への参詣、出開帳（遠方の寺社の神仏や宝物を江戸に運び、期間を限り公開すること）、吉原での遊興、祭礼などさまざまなものが含まれますが、庶民の楽しみの主流は、日帰りの名所めぐりであったといえるようです。

江戸時代の半ばに江戸の人口はすでに100万人を超えていたといえます。この過密都市から日帰り「脱出」して、名所や史跡を見歩き、料理や菓子を食べることを楽しみ、命の洗濯をしたような気持ちを味わって帰って行くことが、江戸の人々の元気回復の妙薬となっていたことは、想像に難くありません。